

# 仏心と葬弁儀 ーその12ー

## 仁々志別川での痛ましい事故

丸和堂を創業して5年目のこと、昭和49年の2月下旬に釧路市鳥取地区を流れる仁々志別川において、小学校入学を目前にした男の子と、その妹の二人が氷結した川に落ちて水死するという痛ましい事故が起きました。葬儀を行った同地区の昭園町内会では、この悲しみの葬儀を丸和堂に依頼。社長の飛田英雄もかつて2歳8カ月になったばかりの愛児を不慮の事故で失った悲痛な経験をしているばかりでなく、サラリーマンからの転職で葬儀社を始めたこと自体もそれがきっかけだったからです。

そんな飛田でしたから、一度に2人の我が子を突然奪われてしまった両親のたとえようのない悲しみが自分のことのように感じられたのでしょうか。経営者でありながら「商売心」が消えてしまい、悲しみに打ちのめされている両親を何とか慰め、勇気づけてあげたいと考えたのでした。

依頼された葬儀ではいつも以上に真心を込めて祭壇をこしらえ、悲しみのうちにも「立派」な葬儀を執り行うことができました。その費用は、通常の料金ならば20万円ほどかかったものですが、飛田は実費としてかかった8万円しか遺族に請求しませんでした。

## 当時の町内会長の回想

「その上、さらに驚いたのは支払いが済んだ後、いったん部屋を出た飛田社長がすぐに戻ってこられて『香典です』と3万円を包んで差し出されたことでした」と、当時の町内会長で葬儀委員長を務められたNさんは語ってくれました。

「今思い出しても痛ましい限りの事故でしたが、確かお母さんがお兄ちゃんの入學手続きのために外出した留守中に起こったことで、ランドセルなどの学用品もすっかり用意されていました。遺体は翌朝に見えましたが、捜索にあたった近所の住民もあまりにお気の毒すぎて、かける言葉がなかったほどでした」とNさん。「それにしても飛田社長の誠意には驚かされましたが、後になってご自分もかつてお子さんを亡くされていたことを知り、なるほどその理由が分かりました。お金のことばかりではなく、その心のもった葬儀での仕事ぶりに皆が感心したことから、以来、町内での葬儀は多くが丸和堂さんに依頼するようになりました」と当時を振り返ってお話してくれました。

ー つづく ー

■ 次回の掲載は八月二十日(土)を予定しております。